

高温・少雨に対する農作物の技術対策

平成 29 年 7 月 21 日
農 業 技 術 課

甲府地方气象台から7月19日ごろ関東・甲信地方で梅雨が明けたと発表がされました。また、气象台甲府観測地では7月14日に8mmの降雨がありました。県下全域ではまとまった降雨がなく、高温が続いており、今後高温が予想されます。農作物の管理に注意するとともに、熱中症にも十分注意してください。

長期間の高温と少雨に関する山梨県気象情報 第1号

7月19日14時30分 甲府地方气象台発表

山梨県では7月上旬頃から、高気圧に覆われやすく、気温の高い状態が続いています。7月1日から7月18日までの各地の平均気温は、平年に比べて1.4度から2.8度高くなっています。また、山梨県では4月下旬頃から低気圧や前線の影響を受けにくく、降水量の少ない状態が続いています。4月21日から7月18日までの各地の降水量は、平年に比べて50パーセント程度となっています。

この状態は、今後1週間程度は続く見込みです。

農作物や水の管理、健康管理等に十分注意してください。

1 気象の推移

	最高気温()		最低気温()		降水量(mm)	
	H29年	平年差	H29年	平年差	H29年	平年差(%)
4月上旬	18.5	0.0	7.8	1.5	5.5	18
4月中旬	22.0	1.5	7.5	-1.0	68.0	244
4月下旬	22.3	-0.1	9.8	-0.2	2.5	13
5月上旬	25.5	1.5	11.4	-0.8	3.0	12
5月中旬	25.8	1.7	14.3	1.0	24.5	83
5月下旬	28.1	2.4	17.2	2.8	18.5	57
6月上旬	27.4	0.4	15.3	-1.0	5.5	25
6月中旬	29.4	2.1	16.6	-1.4	0.5	1
6月下旬	28.3	0.7	18.8	-0.7	58.5	89
7月上旬	31.8	2.2	22.4	1.6	72.5	157
7月中旬	34.6	4.0	24.1	2.2	8.0	19

2 農作物の技術対策

高温・少雨による農作物への影響を軽減するため、次の技術対策を講ずる。
なお、灌水にあたっては、局所的な降雨が予想されるため、その状況に応じて行う。
また、降雨が少ない水田地帯では、地域の水利等に留意する。

(1) 果 樹

共通事項

- ・乾燥防止対策として、約5～7日間隔で20～25mm、収穫後の園では約7日間隔で30mmを目安に灌水を実施する。着色期～収穫期に当たる園では品質向上のため、土壌の乾燥具合を見ながら散水程度の灌水を行う。
- ・樹冠下は敷ワラ、敷草を実施するとともに、草生栽培園では草刈を励行する。
- ・灌水施設のない園は、樹冠下を中心に1樹当たり200～300リットルの灌水を行う。
- ・収穫は、日持ち性向上のため気温の低い朝に行う。
- ・アザミウマ類やハダニ類の発生が多くなるため注意する。特に、ハダニ類の発生が見られる園では早急に防除する。

モ モ

- ・果実硬度2～2.5kgを目安に適熟収穫に努める。なお、最高気温が35前後になると、成熟や着色が遅延する傾向があるため熟度に注意して収穫を行う。
- ・過度な葉摘み、徒長枝の剪除は避ける。
- ・反射光の強いマルチは、日焼け果などが起きやすいので、反射マルチを敷く量や反射程度(古いマルチや裏面使用)を調節する。着色が進んだら早めに反射マルチは除去する。
- ・下垂枝への支柱やつり上げにより、反射マルチとの距離を確保する。
- ・二重袋を使用している園では、果実温度の上昇を抑えるため、直射が当たる果実の内袋を外せる場合は除去する。

ブドウ

- ・着色期の品種では、夜温低下による着色向上を図るため、夕方のほ場散水(5mm程度)や棚面への散水(200リットル/10a)を行う。
- ・収穫期や収穫直前の品種は、裂果の発生が心配されるので、極端な灌水は控える。
- ・高温が続くと着色不良になりやすいので、大房系の除袋を行う地域では、早めの除袋を行う。日焼けを防ぐため果房に直射が当たる場合は、クラフト傘や不織布傘の使用や誘引の見直しを徹底する。
- ・着果過多や樹勢低下樹では、見直し摘房を行い、着色向上に努める。
- ・新梢伸長が続いている樹は、ベレーゾン前か着色が全体に回った時期に、新梢先端の摘心と副梢の2～3枚残して摘心を行い、着色向上と養水分の競合を防止する。なお、ベレーゾン期の新梢管理は避ける。

スモモ

- ・過熟果の発生が心配されるので、果実の弾力と熟度を優先した収穫に努める。なお、日焼け症状が発生している園では、日焼けした果実が腐敗しない限り収穫期まで着果させておく。
- ・強い日差しが続くので、強い新梢管理はしない。
- ・収穫が終了した園でも、来年の花芽充実のため定期的な灌水を行う。

オウトウ

- ・この時期の高温・乾燥は、翌年の双子果の発生原因となるため、定期的な灌水と敷ワラ等により土壌乾燥を防止する。

(2) 野菜

- ・地温の上昇と水分の蒸散を抑えるため、敷きワラや敷き草を行う。
- ・土壌が極端に乾燥する前に計画的な灌水に努める。
- ・果菜類では、着果負担を軽減し草勢を維持するため、不良果（奇形・変形果等）は早めに摘果し、健全果（良果）は肥大し過ぎないように適期に収穫を行う。
- ・夏秋なすでは、つやなし果の発生を防止するため、整枝、摘葉などを徹底し、葉面からの蒸散量を抑える。畝間灌水をする場合は、地温が下がる夕方に行い、翌朝には水がなくなるようにする。
- ・夏秋トマトでは、ホルモン処理を徹底し、着果促進を図るとともに、カルシウム剤の葉面散布や灌水を行い、尻腐れ果の発生を予防する。また、果実に直接、日光があたらないように遮光ネット等を設置するなど、日焼け果の発生防止に努める。
- ・アザミウマ類、ハダニ類、ヨトウムシ類、オオタバコガなどの増加が予想されるため、ほ場の状況をよく確認し、初期防除を徹底する。オオタバコガは、例年より早い時期から成虫の大幅な増加が確認されている調査地点もあることから、十分に注意する。

(3) 花き

共通事項

- ・アザミウマ類、ハダニ類、オオタバコガなどの増加が予想されるため、ほ場の状況をよく確認し、初期防除を徹底する。オオタバコガは、例年より早い時期から成虫の増加が確認されていることから、十分に注意する。

施設花き

- ・寒冷紗などで強めの遮光をするとともに、強制換気に努め、葉面温度の上昇を防止する。
- ・朝夕に灌水を行う。

露地花き

- ・敷きワラ、敷き草を行い、朝夕に灌水を行う。

(4) 水稲

- ・出穂後20日間の高温は、胴割れ等を助長し品質低下の原因となるので、穂ばらみ期以降、地域の水利等に留意して、間断かん水あるいは、かけ流し灌漑等を行い、稲体を冷やす。
- ・栄養不足になると胴割れ粒の発生を助長するので、葉色を見ながら適期に追肥する。

(5) 大豆

開花期以降、高温乾燥が続くと落花等により収量が低下するので、畝間灌水を行い、水分を補給する。

(6) 畜産

共通事項

- ・新鮮で良質な飼料、主要なビタミン・ミネラルを与え、健康な状態の維持に努める。

- ・常に新鮮な水を十分飲めるようにする。
- ・高温時は飼料や水が腐りやすいので、食べ残しを放置しないよう努める。
- ・行動をよく観察し、呼吸が荒い・元気がないなどの異常畜の早期発見・早期治療に努める。

舎飼い家畜（牛・豚・鶏等）

- ・畜舎内温度に注意し、窓や戸の開放、換気扇・扇風機・ポリダクト等の送風器具を使用し、通風や換気を行う。
- ・畜舎内外や畜体に散水、放水を行い、畜舎内の温度と家畜の体感温度を下げる。
- ・密飼いを避け、パドック等には日除けを設置する。

放牧家畜（主に牛）

- ・放牧する時は、涼しい朝・夕などの時間帯に行うようにし、日中は林など日陰のできる場所に放牧するよう努める。

3 熱中症対策

熱中症対策

暑熱環境下での作業は、熱中症（熱射病、熱けいれん、熱まひ）を生じる恐れがあるので、次の事項に注意する。

日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行う。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給する。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に気を付ける。

帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をする。

作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努める。

屋内では遮光や断熱材の施工等により、作業施設内の温度が著しく上がらないようにするとともに、風通しをよくし、室内の換気に努める。作業施設内に熱源がある場合には、熱源と作業者との間隔を空けるか断熱材で隔離し、加熱された空気は屋外に排気する。